

議事録

1 概要

議題・会議名	令和7年度 第3回 学校運営協議会
開催日時	令和7年12月8日（月）午前9時15分から11時25分まで
場所	静岡県立清水特別支援学校 会議室
出席者	外部委員5名 助言者1名（中村米作商店中村様）本校教職員10名 計16名
目的	・今まで本校が積み上げた地域共同学習の良さを再確認し、今後の地域共同学習を充実、深化するためのアイデアと具体化の方法について共有する。
テーマ	『清水とともに』をコンセプトとした地域共同学習 ～今まで本校が積み上げた地域共同学習の良さを再確認し、 更なる充実を目指す～

2 議事

1 令和7年度第3回学校運営協議会 開会 9時15分

- 外部委員5名、助言者1名、本校教職員10名、計16名で開会。

- 校長挨拶
- 出席者紹介

2 協議 9時20分～11時15分（進行：学校運営協議会会長）

- 令和7年度学校・家庭・地域の連携推進研修会 報告

学校運営協議会会長より、以下の報告があった。

ア 研修会概要

- 9月30日に沼津市で開催され、県内各地から100名以上が参加した。

イ ディスカッション内容

- 「地域の活性化」を教育の視点から議論するグループワークが実施された。
- 参加者間で地域活動への関与や意識に差が見られたほか、学校活動における資金面の課題などが共通の話題として挙がった。

ウ 先進事例の共有

- 伊豆地区において、地元の漁師とこどもたちが連携し、漁業体験から調理、地域イベントでの提供までを一貫して行う活動が報告された。これは本校の「お茶プロジェクト」とも共通する、地域産業と密接に結びついた実践的な学びの好事例として紹介された。

エ 県外連携の重要性

- 静岡県特例子会社の連絡会では、千葉県の事業者とも連携し、ノウハウの共有を図っている。県という枠を越えた連携が、新しい発想や活動を生む上で極めて有益であると紹介された。

オ 質疑応答

D委員

- この研修会はどのような会か、主催や本校学校運営協議会との関係について説明してほしい。

副校長

- 本研修会は静岡県教育委員会社会教育課の主催である。学校、地域、行政の各関係者が、学校運営協議会を通して地域全体で子供を育むことの意義や展望についての共通理解を深める研修で、本校の学校運営協議会会長が地域、教頭が学校の代表として参加した。政令指定都市である静岡市の小中学校は独自の枠組みで活動しているため参加対象外である

(2) 今年度の共に育つ地域共同学習の様子

地域連携課長より、以下の報告があった。

ア 職員アンケートの結果

- 多くの職員が、本校の最大の強みとして「地域との繋がり」を挙げており、学校全体でその価値が共有されている。

イ 今年度の主な活動事例

- ボランティアとの協働：中学部美化委員会と地域ボランティアが年間を通じて正門前の花壇整備を実施。継続的な活動により、生徒の主体性が育まれ、地域住民からも感謝の声が寄せられている。
- ゲストティーチャーの活用：マジックショー、三味線、かっぽれ、和太鼓など、多様な専門家を招聘。特に和太鼓では、飯田まつりで保存会の皆様と合同演奏を披露し、大きな達成感を得た。
- 地域防災への貢献：地域住民と連携した総合防災訓練を実施。高等部生徒が主体的に避難所設営に取り組む姿は、地域の方々から「頼もしい」「返事が良く素晴らしい」と非常に高く評価された。
- 学校間交流：新たに清水東高校サッカーチームと美術部で部活動を通じた交流を開始。相互に良い刺激を与え合う貴重な機会となっている。

ウ 今後の展望

- IAI パラスポーツパーク、中央動物専門学校と連携した動物セラピー、庵原地区の地域資源の活用（JA、農産物、くふうハヤテベンチャーズなど）など、新たな連携先との協働を積極的に検討している。

(3) お茶プロジェクト発足時の想いと今後への期待

中村様

お茶プロジェクトの経緯は、2011年の東日本大震災と、それに続く地域社会との関わりへの考え方の変化が大きなきっかけとなっている。以下に、プロジェクトの開始から製品化に至るまでの詳しい経緯を説明する。

ア プロジェクト開始の背景（2011年春）

- 震災の影響：プロジェクトの真のきっかけは、2011年3月に発生した東日本大震災だった。
- 放射能の懸念：震災の数日後、福島第一原発で水素爆発が発生し、その後3月下旬にかけて、テレビでは放射能漏れとその拡散に関する情報が連日のように報道された。
- 静岡茶への影響：3月下旬は、新茶の予約が入る時期であり、茶畠で新芽が出るという静岡の茶業界にとって非常に重要な時期にあたる。しかし、静岡茶が代表的な農産物として取り上げられた結果、「静岡のお茶は大丈夫か」というニュアンスで報道がなされ、新茶の予約キャンセルやお茶の安全性を尋ねる問い合わせが頻繁に寄せられた。
- 経営危機：実際の数値検査では許容範囲内に収まっていたにもかかわらず、報道が長期にわたったため、特に県外の顧客が茶を買わなくなり、静岡茶が県外に出荷されないという厳しい状況に陥った。

イ 中村商店の意識の変化と恩返し

- 地元の支援：中村商店は元々、顧客の95%以上が県外の客で、地元での販売はほとんどなかったが、この危機的な状況の中で、近隣の住民が店を気にかけ、実際にお茶を買って支援していただいた。
- 転換点：この経験が、「転換点」となり、地元に対して何もしてこなかつたにもかかわらず受けた恩義に感謝し、今度は自分が地元の方々に「恩を返したい」と強く思うようになった。
- 学校との連携：2011年の秋頃、「自分に何ができるか」を考え、たまたま清水特別支援学校のホームページを発見した。そのホームページには、学校が地域との関わ

りの中で活動しており、地域の事業者との連携の呼びかけが掲載されていた。

- ・プロジェクト始動：これを機に学校に連絡し、当時の副校長先生（瀬戸脇先生）が快く提案を受け入れたことで、2011年秋からプロジェクトがスタートした。

ウ 初期活動と活動内容の決定

- ・活動内容の調整：学校側と中村商店の間で、数ヶ月間かけて、畑の管理からお茶摘み、パッケージ詰めまでの一連の作業を生徒が担うというプロジェクトのすり合わせが行われた。
- ・初期の場所と交流：当初は学校から歩いて5分ほどの場所にある中村商店の小さな畑を利用した。当初は、お茶摘みを地域交流の場にしたいと考え、高等部の生徒約100人の他、地域のこどもや近隣のグループホームの方々、飛び入りの参加者にも声をかけ、一斉に200人ほどでお茶摘みを行ったこともあった。
- ・畑の移動（2012年頃）：最初の畑は運用上の困難から利用できなくなったため、「ベストオブベスト」の状態で体験をさせてあげたいという思いから、静岡有数の茶産地である両河内に活動場所を移した。両河内で優秀な茶農家である片平様に協力を仰ぎ、一級の畑を使わせてもらえることになった。

エ 製品化とコンテストへの挑戦（2013年）

- ・製品化の目標：中村様は、単なる作業体験ではなく、生徒が自信を持てるような一つの「製品」を作り上げ、コンテストに出品することを提案した。
- ・世界緑茶コンテスト：2013年、品質だけでなくパッケージや活動のストーリー性も高く評価される「世界緑茶コンテスト」に出品することが決定した。
- ・生徒の技術の活用：学校の印刷班や木工班が持つ優れた技術と機械に着目し、お茶本体だけでなく、生徒が作成したパッケージを含めた一体化された製品作りを目指した。
- ・商品「僕らの夢のお茶」：生徒の作業能力に合わせて作成されたのは、ミニサイズの茶箱「ミニ茶箱」で、折り紙で装飾を施した。セット内容は、ほうじ茶、玄米茶、煎茶の3種類で構成され、「友情」「希望」「勇気」の名前が付けられた。外部の施設（エンゼルさん）の協力も得て、摘んだ茶葉を入れたクッキーもセットに加えた。
- ・結果：この商品「僕らの夢のお茶」は2013年の世界緑茶コンテストに出品されましたが、受賞には至らなかった。しかし、この共同での製品作りの経験は、生徒たちにとって大きな自信につながった。

オ その後の継続

- ・定着化：最初の約3年間で集中的な活動が行われたが、その後は教員やPTAの方々の尽力により、プロジェクトは効率的な形で継続できる仕組み（効率的なフロー）として定着した。
- ・継続的な協力：中村商店は現在もプロジェクトに参加しており、今後も学校からの要望があれば、協力を続けていきたい。

カ 質疑応答

C委員

- ・このお茶は販売されているか。

中村様

- ・販売はしていない。当時、学校と「これを販売しましょう」という話はしたが、学校としての販売は難しいということだった。一般販売はしなかったが、学校関係者の中で希望者には譲渡していた。

C委員

- ・お茶プロジェクトの取組を発信する意味でも、ビジネス化していった方が、広く認知される。学校の活動もイベントで終わるのではなく、正当な対価をもらって事業を行うという方が社会的に認知されるようになる。

(4) グループワーク

1班 C委員、助言者、教頭、高等部主事、地域連携課長

【現状分析】

- ・他の特別支援学校と比較すれば地域との繋がりは強いものの、一般の小中学校に比べると交流はまだ限定的であり、改善の余地があるとの指摘があった。
- ・学校に隣接する秋葉山公園は、犬の散歩などで日常的に地域住民が利用しており、自然な交流を生む絶好の拠点となりうる可能性が示された。具体的には、公園での清掃活動や、生徒が栽培したお茶や野菜の販売、カフェの設置などが地域住民との接点を増やす具体的な手段として提案された。

【アクションプランと発表内容の要約】

- ・地域の担い手としての役割：防災訓練や地域のお祭りの後片付け（テント撤収など）において、地域住民が手薄になる「平日の昼間」の労働力として貢献することで、地域からの感謝と信頼を得ることができる。
- ・強みを活かした活動展開：生徒たちの「元気な挨拶」という強みを活かすため、商店街など人通りの多い場所での清掃活動などを増やし、学校の姿を積極的に見せていくべきである。また、生徒たちが真摯に活動に取り組む姿そのものが、地域に喜びや感動を与える価値あるものであるとの認識が共有された。

2班 D委員、E委員、副校長、中学部主事、教務課長

【存在意義・独自性・提供価値】

- ・本校は、生徒の学びの場であると同時に、誰もが尊重される「共生社会」を実現するための拠点としての意義を持つ。
- ・分校からの発展という歴史、知的障がい単一校であることの強み、地域資源へのアクセスの良さ、そして挑戦を厭わない教員組織の姿勢が、本校の独自性を形成している。
- ・生徒の成長が、本人、家族、そして地域社会の全ての喜びとなることこそが、本校が提供できる最大の価値である。

【目指すべき姿とアクションプラン】

- ・地域から「あってよかった学校」と心から思われる存在を目指すべきとの結論に至った。そのための具体的なアクションプランとして、以下が提案された。
 - ①お茶プロジェクトのさらなる進化
 - ②単発の交流に留まらない「副次籍」交流の推進
 - ③発信する内容を精査した、戦略的な情報発信の強化
 - ④地域に開かれた学校として、来校機会を増やす工夫
 - ⑤地域の教育資源としての「センター的機能」の再検討と強化

3班 A委員、B委員、事務長、小学部主事、輝きブック長

【議論の核心と目指す学校像】

- ・B委員より、真のインクルーシブ社会とは障がいの有無に関わらず誰もが地域の学校で共に学ぶ社会であり、その理想から見れば「本来、この学校は作られるべきではなかった」という視点が存在する、という問題提起がなされた。これは現状の学校運営への批判ではなく、社会が目指すべき究極の目標から現在地を見つめ直すための発言であることが、グループ内で深く共有された。
- ・この視点を踏まえ、本校は特定のこどもたちのためだけでなく、地域に住む全ての子供たちのための「みんなの学校」「こどもたちの居場所」となるべきであるとの意見で一致した。

【アクションプラン】

- ・この理想を実現するため、グループは障がいへの理解を特別なものではなく、幼少期からの「当たり前」の経験として根付かせること、そして制度的な壁を越える連携を構築

することが不可欠であるとの結論に至り、以下の具体的なアクションを提案した。

- ①早期教育の推進：幼児期から本校の児童生徒と触れ合うイベントを企画・実施し、幼い頃からの自然な相互理解を促す。
- ②交流籍校との連携深化：交流先の学校の教室に本校生徒の机やロッカーを常設し、不在の時でも「常に在籍する一員」であるという意識を、双方の学校で醸成する。
- ③行政組織間の連携：静岡県（特別支援教育）と静岡市（義務教育）の縦割り行政の壁を越えた連携を強化し、地域全体でインクルーシブ教育を推進していく。

（5）各班の発表

ア 協議：清水特支の存在意義と独自性

（ア）グループ1 報告（C委員）

- ・ 独自性/繋がり：地域の方が来てくださる繋がりが「非常にある」が、一方で、一般的には地域との繋がりは「そんなないよ」と感じる地元住民もおり、もっと繋がるべきという意見が出た。
- ・ アクションの方向性：地域の方と関わりを持つため、三保の海岸清掃のような関わる人が少ない場所ではなく、商店街や人の多いところでの活動が良い。また、公園を活かし、犬の散歩客が多いという特性を捉え、公園の清掃を行い、交流を作るというアイデアが出た。さらに、カフェや野菜販売を通じて交流を深めることも提案された。
- ・ 存在意義/喜び：これらの活動を通して、生徒の笑顔や頑張っている姿が他の人に喜びを提供し、学校の存在意義として多様性や理解の啓発に繋がる。

（イ）グループ2 報告（教務課長）

- ・ 存在意義：学校側は学ぶ場所だが、社会全体で見ると、共生社会の実現や、地域にとって役立つ必要のあるところであるという意義を確認した。
- ・ 独自性：地域との繋がりが深く、分校時代からの長い歴史と思いを全て受け継いでいる点。また、知的障害単一校であること、清水区に一つであるため、区内での連携や活動において動きやすさがある点が独自性である。
- ・ 喜びの提供：こどもたちの成長は、本人、家族、地域、見た人たちみんなが嬉しいという喜びを学校が提供できる。

（ウ）グループ3 報告（輝きブック長・B委員）

- ・ 存在意義：教育の格差を減らす、地域・子どものためという意見が出た。
- ・ 独自性：開校時からあった学校への偏見が、地域との関わりの中で少なくなっていることがある。
- ・ B委員からの発言：開校に尽力したが、今は「この学校を作るんじゃなかった」と後悔しているという発言があった。その理由は、理想とする本当のインクルーシブ教育では、障害のあるこどもも生まれた場所で地域のみんなと一緒に同じ学校に行くべきだったという強い思いからである。大人になって地域で生きる際、行く先々で自分の障害を説明しなければならない現状を変えるため、小学校入学の時点で支援が必要な子どもたちは、生まれたときから一緒のエリア、学校で知ってもらう必要がある。
- ・ 現状の評価：清水特別支援学校は、地域で分かってもらえる人が多いため「すごくいい学校だね」と言われる現状があり、インクルーシブな側面が既に入っていると評価された。最終的には「みんなの学校」のようなネーミングになってほしいという理想が示された。

イ 協議：清水特支といえば ○○

（ア）グループ1 報告（C委員）

- ・ 元気な挨拶が非常に特徴的である。
- ・ 生徒の優しさが、安心や助け合いに繋がっている。

(イ) グループ2報告（E委員）

- ・地域との共創。共に創っていくことができているし、今後もやっていかなければならぬことであるという認識で一致した。
- (ウ) グループ3報告（輝きブック長）
 - ・オープン、またはみんなの学校。特別支援学校という名前ではなく、開かれた学校という認識を持ってほしい。

ウ 協議：本当はこう思われたいとそのためのアクション

(ア) グループ1報告（C委員）

- ・目指す姿：地域と繋がりがある学校、「この学校があつて良かったな」という存在になりたい。
- ・アクションプラン：
 - ①防災訓練：子どもたちの若い力から安心感を提供し、特に平日昼間の担い手として地域の役に立つ。小中との連携も可能となる。
 - ②地域活動：人がいるところ（秋葉山公園、商店街）での活動を重視する。
 - ③祭りの片付け：お祭りは土日の活動だが、平日の人手がない片付け作業を担うことで、地域との繋がり方を深め、「あって良かった」と思われやすい存在になる。

(イ) グループ2報告（D委員・教務課長）

- ・D委員からB委員の発言への応答と目標：清水特別支援学校は今もなお担うべき役割がある。「あって良かったね」と誇らしく胸を張って言える学校であり、インクルーシブの考え方方が社会的にも認知された暁には「（清特の）役割終わったね」という時代が来ることが理想である。
- ・アクションプラン：
 - ①お茶プロジェクトの進化：中村様とも繋がっているプロジェクトをさらに進化させ、新たなことを加えていく。
 - ②市教委への働きかけ：交流籍ではなく、副次籍という形で。名簿に載り、下駄箱があるなど、いつでも行ける状態を作り出す。
 - ③情報発信の強化：学校自体を知つてもらうため、情報発信を強化し、その内容を精選する。
 - ④センター的機能の見直し：特別支援学校の教育内容や役割を再確認し、発信していく。

(ウ) グループ3報告（輝きブック長・事務長）

- ・目指す姿：「みんなの学校」と思われたい、「子どもたちの居場所」でありたい。
- ・アクションプラン：
 - ①早期教育：幼児期の子どもに清特に来てもらい、イベントを実施して知つもらう。ポイントは小さい頃から関わりを持つこと。
 - ②交流籍校との交流深化：単発ではなく、交流籍校に生徒の机や椅子、ロッカーを置いて、「今日は特別支援学校で勉強していますよ」という認識を持つもらう。
 - ④義務教育との連携：政令指定都市である静岡市との繋がりを深く持つことで、義務教育の世界と連携し、インクルーシブ教育を目指す良い交流を生み出す。

3 事務連絡 11時15分～11時20分

(1) 冊子「輝きブック」作成協力依頼（輝きブック長）

- ・目的：今年度の教育活動の成果をまとめた冊子を作成する。
- ・依頼：学校運営協議会委員の皆様に「応援メッセージ」の執筆を依頼したい。
- ・期限：2月上旬を目途に提出をお願いしたい。

- ・配布：保護者へはデータで配信し、地域の図書館等へは限定50部を冊子として配架する予定。

(2) 次回開催案内（副校長）

- ・日時：令和8年2月13日（金）午前9時15分～11時15分
- ・議題：令和7年度学校評価、令和8年度学校経営計画案の検討

5 閉会 11時25分

【次回の予定】

予定日時	令和8年2月13日（金）9時15分～11時15分
場所	静岡県立清水特別支援学校 会議室

3 欠席された委員の意見

(1) F委員

- ・地域とのつながりを深めるには、清掃活動を通じた貢献も有効である。昨年度も峰本院の清掃が実施されたが、先生方の指示に従いながら、さぼることなく丁寧に取り組んでいる点が評価できる。峰本院としてはいつでも清掃に来てほしい。例えば大祭前に本堂の掃除を実施し、その活動をメディアに取材してもらうことも有効だと考える。
- ・中学部、高等部の作業学習の製品は、中学部の封筒や高等部のガラス製品、野菜などクリエイティの高いものもある。障害がある子どもたちが作っているという側面も含めて、支援学校の良さをアピールしていくとよい。

(2) G委員

- ・清水特別支援学校（清特）の存在意義について。保護者としては本校があることがとても助かっている。下の子どもが小学校の支援級に通っているが、支援の手厚さがまったく違う。子どもの特性を生かして成長をさせていく上で、本校は最適である。居住地域や地元の子どもたちとのかかわりは、本校よりも地元の小学校の方が確かにある。しかし、中学校になると、子どもたちそれぞれの成長に合わせた指導によって、普通級と支援級の交流が希薄となり、支援級は支援級の中だけのコミュニティになってしまう。本校では、学校がある飯田地区との交流や、小学部・中学部・高等部の仲間意識が育っていく良さがある。
- ・「○○といえば○○」について。私は清水特支といえば「活気がある」という印象を持っている。子どもたちや先生方のあいさつがてきており、学校がワンチームとなった元気な学校である。また、お茶プロジェクトや松葉かきは、本校でなければできない活動である。子どもたちが卒業するときに清水特支で学べてよかったですと思えるような学校になっている。
- ・アクションプランについては、現在も地域に広く深くかかわるような取り組みができるおり、この流れを継続していくことが大切である。昨年から参加している飯田まつりも、今年は中学部の太鼓の演奏が加わった。来年度は新たな取り組みが加わることを期待している。
- ・他のグループワークのアクションプランに、防災での貢献という提案があった。先日の地域の防災訓練では、地元の中学生が豚汁やご飯の炊き出しを行っていた。実際に災害があった際、娘は避難所でどんなことができるか想像できなかった。居住地域でのかかわりを大切にしながら、災害時に本校の子どもたちができることが増えると良い。